

## ネギハモグリバエの別系統の発生について

## &lt;発生経緯&gt;

平成30年10月に、ハモグリバエ類により秋冬ネギの葉組織が食い尽くされて白化する被害が県内ネギ圃場において発生しました。県農業総合センター園芸研究所が被害株から得られた羽化個体について、検鏡および（国研）農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター所蔵の塩基配列データ（上杉・徳丸，2019 応動昆大会）を用いて塩基配列の比較検討を行った結果、従来の塩基配列（以下、A系統と略記）とは異なる塩基配列を持つネギハモグリバエとして同定されました（以下、B系統と略記）。B系統は、平成28年頃より京都府で、平成29年頃より富山県で発生が確認されています。

## &lt;特徴&gt;

ネギハモグリバエA系統と今回新たに発生が確認されたB系統とは、形態による識別は困難です。

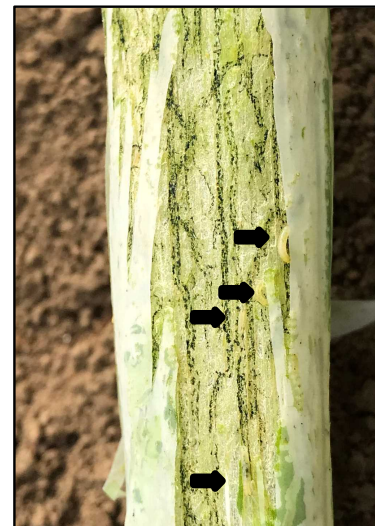
B系統は、一葉あたりに複数頭の幼虫が葉の内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害することが特徴で、A系統と比較して、1葉あたりの幼虫数が多い傾向があります。B系統の初期の食害痕は、従来のA系統と同様で、不規則な白線状ですが、進展すると近接した食害痕同士がくっついて、葉全体に及び、葉が白化したようになります（写真1）。さらに進展すると、葉肉が食い尽くされて、表皮が浮いた状態になり、表皮を剥離すると、多数の幼虫が確認されます（写真2）。

## &lt;防除対策&gt;

- (1) 発生を認めたら、ネギハモグリバエに適用のある薬剤により、発生初期の防除を徹底する（令和元年5月20日 病害虫発生予察特殊報第1号参照）。
- (2) 被害葉及び収穫残さは本種の発生源となるので、残さは圃場内に放置せず、一カ所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。



写真1 食害痕により、白化したネギ葉

写真2 表皮を剥離した時の被害部の様子  
(矢印は幼虫を示す)